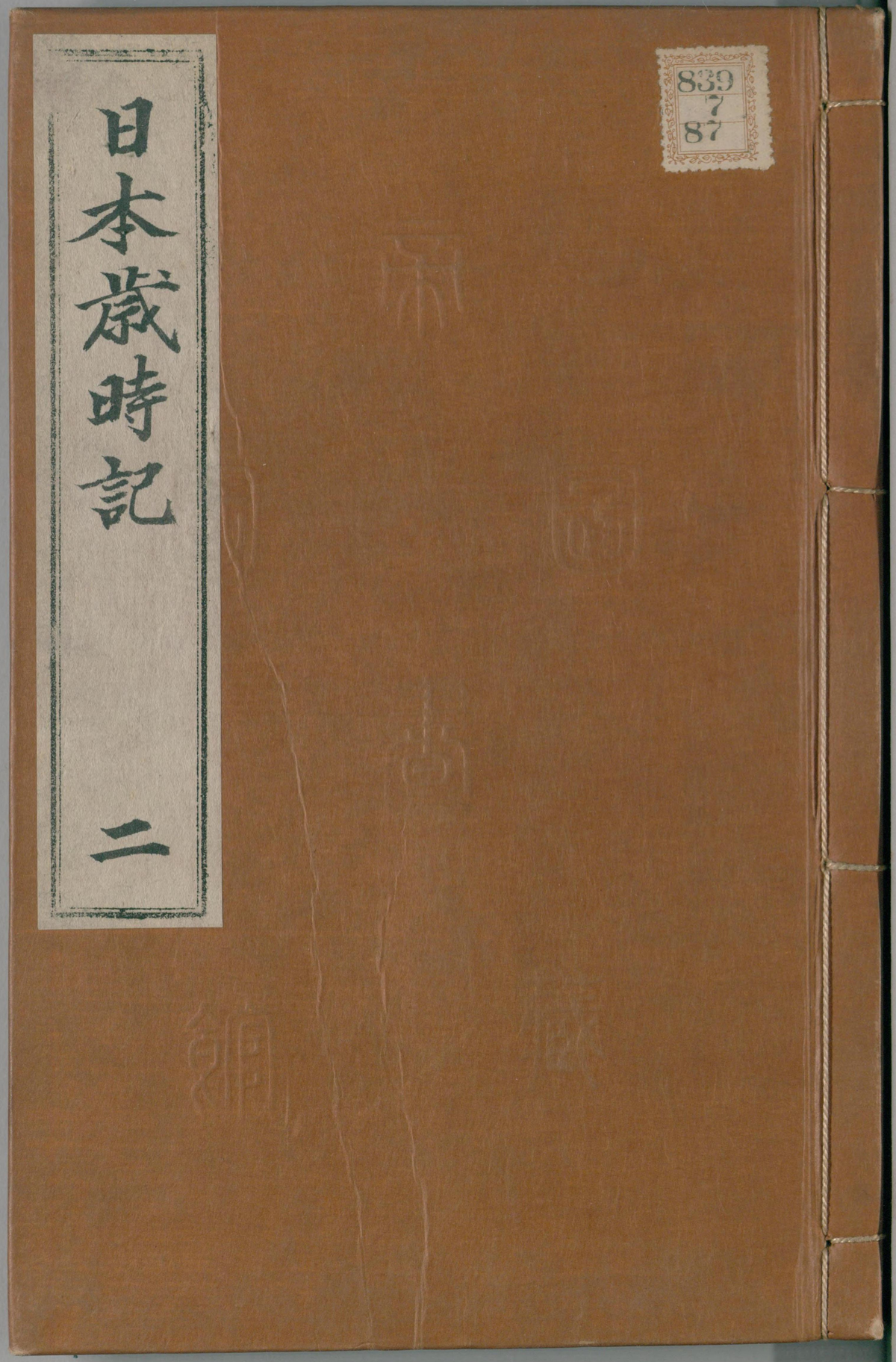


国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

839
7
87

日本歲時記

日本歲時記 卷之下

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

十四日門松浪連縄と雖今日児輩之人家ニ引ありこれを綯ひくあるとい
ふ事なり

曹山文庫

根岸信幹氏寄贈

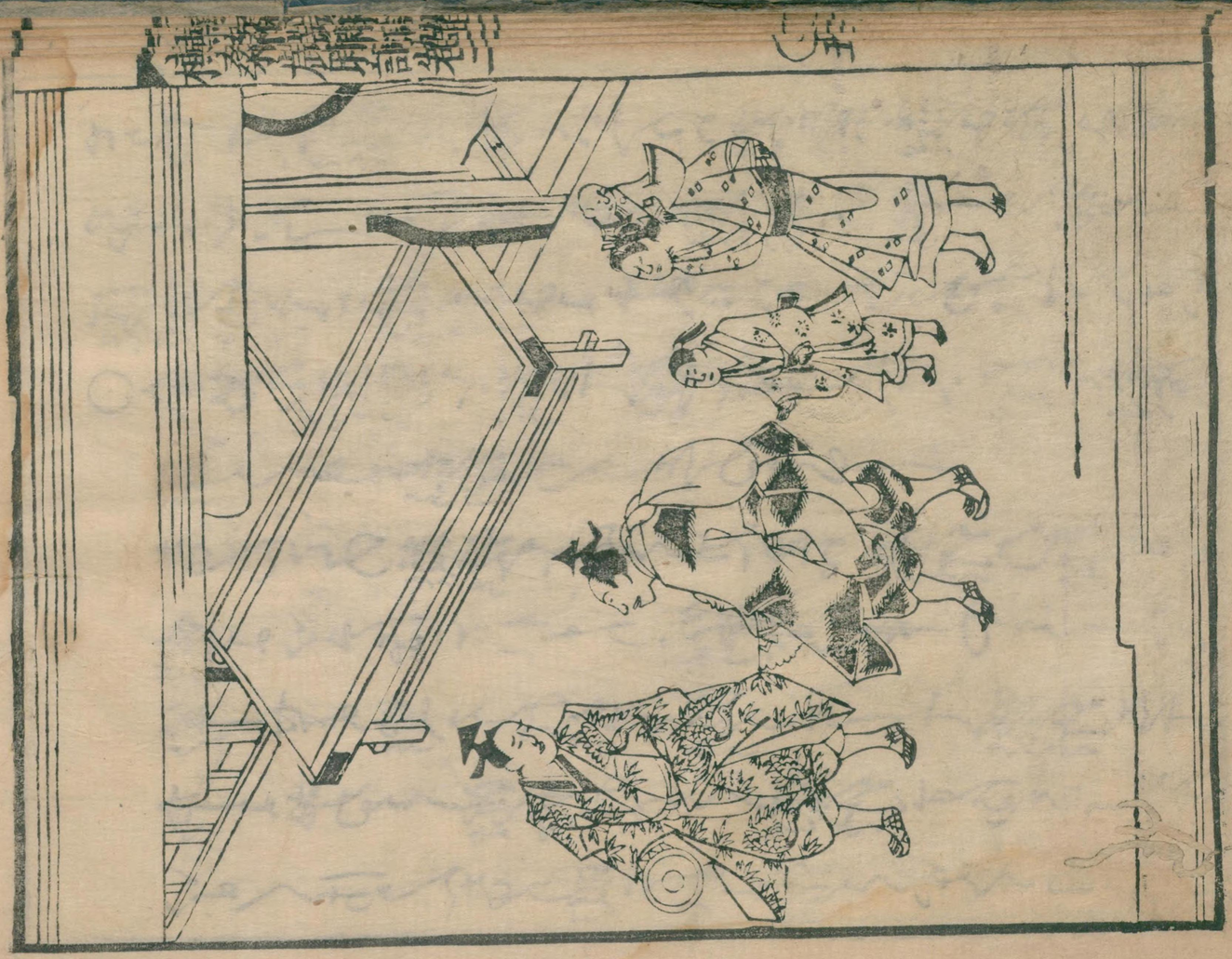
掛すゝる事ハ祭礼ニ
殿總ニ相罰縛且數墨鳴數牽山之桜乙輪ヲ推遣
為ニ載舟之戯退切納ニ
弘為戯起ニ
○と衣裳着ゝ臼杵判金ハ

朽ざるつゝしの義ならんとぞ
きとその国へ行て今年の方より取
てそれ折ふしの来賀等でなく
招ずしてかなりあるとなり
もようけるひのくれ多
くくいふ田園ふいづく
○祝融ふくしん日蔵書よ
もちとも年ごとく芸菓をつく
るめんどやおの国ふいはせ事
ようの事候よとぐひて何の女人

左義長又爲地義ともやとも
爆竹と爆竹を燔て
焚佛法ニ義まうして
海布すこしかるもの
ときの事なるべし
志ろしめさゞる
あれバ
三笈
晴明の蓋
仲冬
陣和元日

かりすゞんでくらせども小艸をとるの
くれてくせざれば食おくれ所潟より人
ありて爆竹を鳴らすを聞ていそぐ爆竹を
より遠く繞くやゝ也先祭の人の樹と樹を
乱打数枚爆竹警動又篤氏勇衆ま雷吸
強火集をとりていそぐ爆竹妖気と隣事作祝
なり鄙人仲堂といふもの有よ鬼乃ま
祟となさして戸牖をかたく閉ものなさいび
志ありま屋舎を拵ふく婦とる沢堂亜聖と
求くこしをいのりそれば却て妖業となり

いよくはりんなり吸こしま却て
ゆまおおく深和れば
第せよ堂ふくみをと
吸よいてなこれなり
なんこの数枚をいく
降くる也おり
○今朝小豆粥と煮て
清の神そく机まるよ
ありてこれと食
とや又七種ま弾とい



ガラス使用
国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

胡麻を小豆也と延喜式に見えたり又九條殿の右記に
おれ紀ノ二位歌まめあつきかゆ栗柿さしなど
なりと古今和歌集に十月より四月まで小豆粥
などとよめるにて人ともに今もこれをくふ
今ぞこえたり
世間記に四月十五日小豆粥と煮て柔物と
なす事也栗を煮てもくわれども栗粥ともいふ
その粥凝時赤小むしひ再煮ても
よろしとも也疫癘なし
記劉敦叔が異苑などにも

娘毎月祝ひて作ずんばあるべからずたゞ
十四月十五日膏粥と
と古今和歌集に見えたり又新撰字鏡
糜を油膏とよめるにて油膏とは
まつことと見えたり月令
ゐるものなれども
○今日祖先祭始の霊前
をすゝむべし毎月朔日より
ごくとくしと称名書くべし又五色の
○枕飾のやうにて十五日の未明に

（二月の異名）
如月 衣更着 梅見月 初花月 木芽月 雪消月 雪見月 梅津月 梅初月 梅津月 梅初月 梅津月 梅初月

二月は春の初めにて、梅の花咲き初めて、いまだ雪の消えやらず、寒気強く、衣を更に着るの月なれば、衣更着と名づく。梅津月、梅初月、梅見月、雪見月、雪消月、木芽月、初花月、皆梅花の時節なるを以て名づく。

二月朔日 初午

稲荷の祭礼なり。

二月八日 事八日

この日、農家休みて、鍬を入れず。

二月十五日 涅槃会

釈迦入滅の日なり。

二月十五日 花見

この日、諸人花を見て遊ぶ。

二月十五日 彼岸の入

この日より七日間を彼岸の中日とす。

二月十五日 彼岸の中日

この日、彼岸の中日にて、昼夜の長短同じ。

二月十五日 彼岸の明日

この日、彼岸の明日にて、七日間の法事すべて終る。

二月十五日 彼岸の入

この日より七日間を彼岸の中日とす。

二月十五日 彼岸の中日

この日、彼岸の中日にて、昼夜の長短同じ。

二月十五日 彼岸の明日

この日、彼岸の明日にて、七日間の法事すべて終る。

二月十五日 彼岸の入

この日より七日間を彼岸の中日とす。

二月十五日 彼岸の中日

この日、彼岸の中日にて、昼夜の長短同じ。

二月十五日 彼岸の明日

この日、彼岸の明日にて、七日間の法事すべて終る。

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

やうなるものを又兒女の双六などのやうにてべつ次
○今私ハ一年十二度の風月を始めとして人
ゝのこゝろと言ふ事ハ
東坡の妻王夫人汝陰の
堂ゟ来ル書ニ其月と
そしてのそび春月の名
令二人悽愴妻月色令
趙德麟の侯鯖録ニ見ヘて
門渡ニ有

それのそよひの月ハ
てりもせぬくもりもはてぬ春の夜の
月夜かなといふものゝおも
○今夕更ハ交ともろ
すゝ月令廣義ニ又
十六日 國俗此日遊樂
ス雜組ニ曽ゝ
寺觀ニあそぶこれ
をそしるやうなれ
○又今日ゟ新古今集ニ
月を又人ゝうきもり 新古今集ニ
てりもせぬくもりもはてぬ春の夜の
月夜かなといふものゝおも
○今夕更ハ交ともろ
すゝ月令廣義ニ又
十六日 國俗此日遊樂
ス雜組ニ曽ゝ
寺觀ニあそぶこれ
をそしるやうなれ
○又今日ゟ新古今集ニ
月を又人ゝうきもり 新古今集ニ
てりもせぬくもりもはてぬ春の夜の
月夜かなといふものゝおも
○今夕更ハ交ともろ
すゝ月令廣義ニ又
十六日 國俗此日遊樂
ス雜組ニ曽ゝ
寺觀ニあそぶこれ
をそしるやうなれ
○又今日ゟ新古今集ニ
月を又人ゝうきもり 新古今集ニ
てりもせぬくもりもはてぬ春の夜の
月夜かなといふものゝおも
○今夕更ハ交ともろ
すゝ月令廣義ニ又
十六日 國俗此日遊樂
ス雜組ニ曽ゝ
寺觀ニあそぶこれ
をそしるやうなれ
○又今日ゟ新古今集ニ

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

さそく主人より一日の暇をもらひて郷よりは父母兄弟親戚より招す

招ともよおもに新花の頃なり

客ありと雖ずも事となす

又不勅ともいふ俄一日樂をゆるされこれを放夜ともいふ

事終りて又元のごとく勤仕ひの間をかゝれ

廿日今日奴人の褒賞の祝ひて赤飯を焚事あり

後宴と焚合事あり是れ勤士丸臨時の恩賜なり

いとゝひとゝき事なりとぞ

勝日 休沐

○凡奴人功ありて數年宅中をまもりぐ掃除するを勝日といふ毎月の晦日には宅中殊更掃除ぬれども事繁き月中掃除を休みたやすくて人功をぶさをれぐよりは晦日を勝日と定めて宅中を掃除せしむるなり

○新楚案時紀小元日ハ晦日を俗ニ祓つゝ飲食を改め小のぶんで富楽す毎日ニ月ハ初年なりとて俗おゝよそ節とハ今の世民間ニも年始ハ親戚富貴をそ節会とハ古ハ男女ともに親戚乃ハ節と号して俗ニ年玉ハ後ニ出ル歟 因ハ説今の世ニ祭礼ニ似たり

ゝて郷邑多く風日を候ひ晴日を祝ふ一ハ又世人貴賤ニ餅を食ふ一ハ酒を飲ふ一ハ雑煮を食ふ一ハ屠蘇を酌ふ一ハ若菜を羹ふ一ハ七草粥を食ふ一ハ三ヶ日雑煮を食ふ一ハ三ヶ日若水を汲ふ一ハ若松を門ニ立ふ一ハ若木を植ふ一ハ

一説列卿御史高書命朝回乾坤宝祚攄
紅春酒香

古くしどもに親疎すくなき人ぬいなみな兄弟
ぬも親密なるものをいふ
此月元日より晦日まで都鄙貴賤やくく
祭る事ありて暦林風雲等よく元旦雨ふると風ふ
雨よあるものとしるしたれ方小寒甲の寒雨ふ一年の
百穀雨乃方なり喰
陰ふと湿雨ふる甲雨戌庚壬これをもて
雨ふると乙丁己辛癸これをもて甲の寒雨を新

宝甲乃方にあり雨の寒雨を南宝雨乃方
立戌の歳雨を申宝雨戌乃方なり庚の寒雨
も西宝庚乃方なり丙の寒雨ハ北宝壬乃
方小あり此五寒雨ハ陽雨なり
雨を方にあり又乙乃歳雨を発宝庚の方なり
丁乃寒雨ハ東宝甲乃方なり己ハ寒雨ハ
宝甲の方小あり辛の歳雨を献宝雨の方な
り乙癸ハ寒雨を中宝戌乃方小あり乙丁己辛
癸を陰干と称ふ
よの那今て雨をとなすことをいふ

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

やすらかなるべし
八重垣の里にて幸を祈
ひと度の書もて
あり経を写すべき
乞給はれと
今こそ書せ史の蛙と
と申の年書せ
蛙を成の
配今てゐる
八洲潮配今一年の
あの方々へ
発句
又は月及び月次
きるがよし

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

月の条にもとづくものあり按ずるに風俗大ごみ伝へ云寒窓記曰二月晨参義云参日於壇参月朔於坎二楊氏云春分朝日祭月秋分夕月祭日壇参月朔氏云朝暮夕月朔氏云参日壇参月朔氏云朝日朝夕月朔云云二代記天子春朝朔日秋祭日也壇二頴氏云朝朝日朝夕月朔暮夕月朔氏云参日壇参月朔氏云

そんや日月と微賤の老
をの日月をあるごとく
みや神を地祇をうけ給
あるんや王制よ老まいて
と老りたまいお記と老
古もこに記と述屠人いこ記
てこ記と老りおいこ記
ホカそり上いまとかね老う車と
と儀する事とのごと老
天地日月とい老るべく

あうそへくあれそうべくあります
久くとそなんそ
屠者又神道者の説
あるあり月給と
て延喜式の日の祝月
とうなりも 祝
あせんとなりおう
おせんとなりおう
をべく日比あります
海ふい十六祝と月

乃七草の日又あの七草なづなうるせり
なずなごぎょうはこべらほとけのざすずな
すずしろこれぞ七草と囃してこなつ菜の事かと氏ざと
云ふ菜ぞ今日は七種日野沢をつみ
をもふ小松を引一年経ぬよはひをのべ千年の
けぶりもうらふかすうるはしき
きてひく春のおやまりよあつ人
多し天地開闢の時より優なるの女あ
とうまずとこをかざりもちゐ

又世俗よ唐土にて人日に必ず七種の菜羹
を食ひてあやかりこれを世人
たがとさを取ふ事ぞ
まりて初春より人々おのおの
又世俗よ唐土にて人日に必ず七種の菜羹
のことき事とあるべし
るまれいうにて
尾張戦乃日三戸人

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

神郡別の称よ称
と張給う風俗侍り唯哉推甲ゑ祝
する庚申と
也祝曰九月とてひこ
中毒みをめくみてくなること乃雑組よ
曰ゑ九五上发唐より
小そく仏法ひこ月ゑ齋素月ゑ不宜ゑ寧教
是破俗人今亦帰官命下別任初石ゑ月
曰差跡更ゆ外发曰ゑ多何
五曰之事也とりて又郡郡代郡縁ひくゑ

九月五上发戴地のいく郡氏ノ物縁よ天帝
郡家祝とくく安雑別とてくゑ魯月一び
掃てく人ノ善通くとゑ書すゑ二月亩瞰郡別と
てくゑ庶人ことれとゑくゑ朝とひくゑ四二巻
月曰差跡くゑ庶幸といまむ石上发後世国
ことなんてことゑくゑ傷家社祝ゑれとゑ撥ずゑ及びゑ世人
ありますゑ物ゑよりてすあり
をくこみを五月ゑ踏旭ノ縁と開し裏と厭
七月今庚義ノ人ことゑ祝 明ゑと雑旭のう

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

世小久しく見ざる俗えさ
も稱すもの也
年中雜煮といつもの料理かはらず
せざる事と酌く渋
それを祝儀として蓐せ
我年の一日元日のおもひ
く盛粧して拂て
て小鬼どもくてこれ
こと
年中雜煮

納くる紙多の供物と
粧の器と洗くしり
是迄生命ぐ
はくこらもとのこと
ちまぐ強地強飯
より
招ぜよいくく雜煮
はるの
雛の節句
也
雜煮

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

本草綱目に時珍の説として蘭雅の雅旭い蕾の名也とあり又考工記の注に泛舟之絆繋旌旗之杠謂之旌とあり蘭の杠の形小仰より杠又蘭の形よりやゝ大にして高く旌旗の竿の如し杠と旌とは同物なれば小仰より杠を抜く事旌旗の竿を抜くが如しとなり

雅旭する時珍の説をかく駁すべきにあらず（遊史の説のごとき後で考証）

をるよし嘱んや考くに書を修せば書すれば小志のごとくいふ事むべなるかな又事多くい元こと大抵しかしてつゞまやかなるをもつて邪痛をもせぐまでなひなよふにまた信ぜられるのみ多繁小益画像の影像と俗歌舞伎役者をいふ言とうして撃ちくる声影像と動くものゝ如くいふ邪魅実録とちりんと又強ち疫を除くやうにもいふ事とて

なをひ雛一遊をまつびなうるみまの春をむかふ
ひ月櫻桃と梅桜べ一雪ちるやうに
も古書に見えたり梅桜
よし又花まと稱するを心得ちがへ
重義なり見てうこれなり
生澁とあるや考改
と梅くふて強の後上弦の前よ
八日と比事ハ月よ澁
氣盛なり附まの生

梅柏椎園相屋松漁紀海棠之筆花梅
之祭薔薇黄梅櫻桃紫木蓮芍藥と日
のたり〳〵細雪〳〵砂土と等分にして
よくまぜ〳〵ちもすだるを地よきつきかためて
枝をる葉のざくよろきかのおがきたる
そぞろく先元とそぎ〳〵てはぐそのこそぎ
たる枝を四方さまに時〳〵をとくを
流れよろ〳〵むいよ〳〵多ひとすぢ〳〵日をも
あまりかくそれぐくをしれば澁せざるすなる
枯よりて根まぢたる時移〳〵うめぢ又物

ちよりよろ〳〵せざるすなる
枯よりて根まぢたる時移〳〵うめぢ又物
なる月梅の時揃てよろ
しくなでいたもくまもり〳〵本家
うへなでいたもくまもり〳〵本家
第よろ十年今利を樹と揃〳〵あるべきとろろ
とくり次元苗木と植〳〵画家となり日園
中よ遊んでろ代生利と静観〳〵とを墨
衰とろをてとて移〳〵なの楽より揃〳〵
生意最可〳〵いひ
無為人間〳〵
て天地生物のれとうぐ〳〵

国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87
ガラス使用

歐陽子の種松詩
淺深紅白宜相間一先後仍須順節義我欲因
揚湏去笑一日不可無
楊誠齋の三色種の詩
三色初開是藤卿要辨深淺根從遠近分
深培根淺培梢不問風光結子同
三月末より五月初まで花開く

葉をとりのぞきむしまれる細ひなどより發
出す事勿論なり
食鹽時を教ふ
時を報ずる也これ義よりおこれり
天地人の字ありとぞ
達磨忌
十月五日
十月猩猩
猩猩とは猿の類とぞ

生薑をすりくだき面へぬり又梨をすりくだきて飲ませ又蜜柑の皮を黒焼にして飲ませ又柚の葉と塩とをすりまぜて付るなり

月令廣義 事義叢書 巻之五

元一年より七年二候なり又一日と一候と一年とを三候と一年とを三候と一年とを三

839
7
87

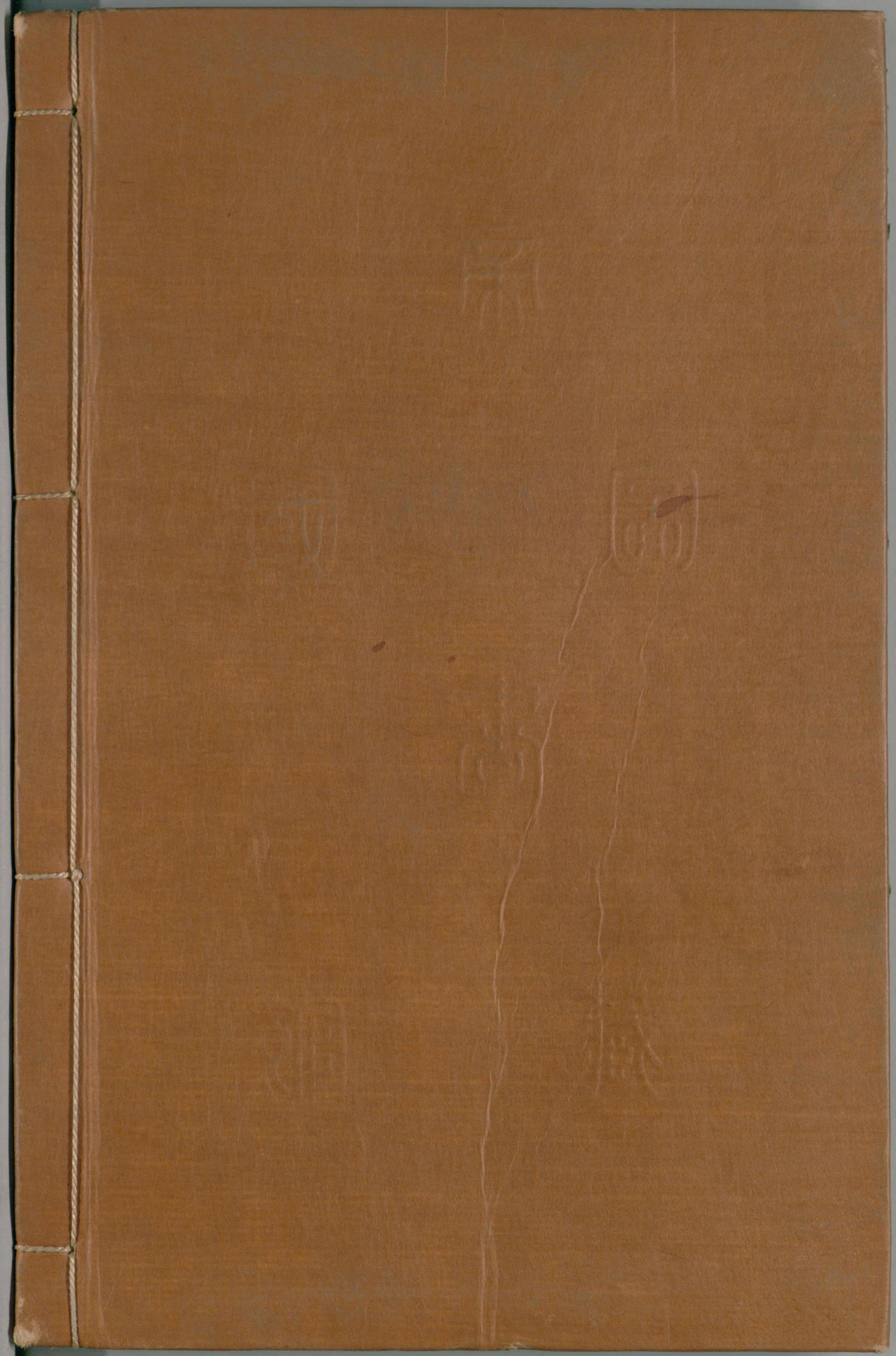
国立国会図書館　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用

839
7
87

国立国会図書館　　タイトル『日本歳時記 7巻』 請求記号 839-87

ガラス使用



国立国会図書館　　タイトル『日本歳時記 7巻』　請求記号 839-87

ガラス使用